

2024年10月15日

ルビンシュテイン著、小野隆信訳

『人間と世界』

書評

「人間はなにゆえに人間であるのか」、ソ連時代を代表するオデーサ出身の哲学者・心理学者のセルゲイ・ルビンシュテイン(1889~1960)がこの問題を追った。20歳のときドイツで学び、革命後オデーサで大学教員と図書館長。30年代にレーニングラードでゲルツェン名称教育研究所の心理学講座主任。1940年『一般心理学の基礎』でスターリン賞。42年3月まで封鎖下で活動。43年にモスクワ大学で心理学科を創設、ソ連科学アカデミーの心理学部門を創設。40年代末に「反コスモポリチズム」

(反西欧の愛国主義)運動の標的にされ、役職を失った。ユダヤ系であることも影響した。その後、雑誌『哲学の諸問題』の編集部長として復活。

復活。

唯物論者が人間を語る

本書は哲学の分野の名著「存在と意識」(57年、日本語訳が寺沢恒信、81年、青木書店)の続編にあたり、「存在と意識」で提示した問題の答えが本書にある。本書の発行は97年、中には「ドイツとロシアの全体主義の比較」も含まれており、弟子たちの努力で出版されるのはソ連崩壊後となった。

動家)教育のテキストでは、マルクス主義の3つの構成部分(哲学、経済学、社会主義または階級闘争)のうちの哲学は「フオイエルバッハ論」(エンゲルス)と「唯物論と経験批判論」(レーニン)の焼き直しで、「世界は人間(自分)の外に実在する」として、「世界は自分の中に存在する」という観念論との論争に終始しているからだ。唯物論ではその認識が集団的であることを前提としているが、人間同士がどう関わりあいながら世界を認識、また変革していくのかについては書かれていない。「自由とは必然性の洞察である」(ヘーゲル)、「エンゲルス」ということで、法則を認識した人間(集団)が革命に向かうという、第3課に「一飛びしてしまおう」。

本書の魅力は、唯物論に立脚しつつ、「人と人とのつながり」を探究したこと。というのは、我が国の従来の労働者(活

人民芸術家でモスクワ音楽院教授のリュボイ・シンハノヴァ女は、2007年4月2日、東京文化会第26回定期演奏会月2日、東京文化会開催された「写真」マは「歌い繋ぎたいアンメロディー」で美しい曲が多く演奏された。ピアノは小笠原

オルガ

L・シ



懐か

二

二期会ロシア歌曲

会第26回定期演奏会